目次

二〇一五年秋　7
一九八二年～一九九四年　21
一九九五年～二〇〇〇年　53
二〇〇一年～二〇一一年　87
二〇一二年～二〇一五年　138
二〇一六年　187

原注　196
著者あとがき　198
日本の読者の皆さんへ　200
文庫版に寄せて　著者からのメッセージ　203
解説　伊東順子　206

評論『82年生まれ、キム・ジョン』以後に
女性が語り、書くということ　ウンユ　223
訳者あとがき　238
文庫版訳者あとがき　244

〔　〕内＝訳注

82年生まれ、キム・ジヨン

二〇一五年秋

キム・ジョン氏、三十三歳。三年前に結婚し、昨年、女の子を出産した。三歳年上の夫チョン・デヒョン氏〔韓国では結婚しても名字が変わらないので、夫婦の姓が異なる〕と娘のチョン・ジウォンちゃんとともに、ソウルのはずれにある大規模高層団地の二十四坪のマンションにチョンセ〔韓国独特の賃貸方式で、入居時に多額の保証金を大家に預ける代わりに月家賃が発生しない。保証金は退去時に全額返却される〕で住んでいる。チョン・デヒョン氏はIT関連の中堅企業に勤めており、キム・ジョン氏も小さな広告代理店で働いていたが出産とともに退職した。デヒョン氏の帰宅時間は毎日夜の十二時ごろで、週末も、土日のどちらかは出社する。夫の実家は釜山だし、ジョン氏の両親も食堂を経営していて忙しいので、ジョン氏は一人で子育てを担当している。ジウォンちゃんは一歳の誕生日を迎えたこの夏から、団地の一階にある家庭型の保育園に午前中だけ通っている。

キム・ジョン氏に初めて異常な症状が見られたのは九月八日のことである。チョン・デヒョン氏が日付けまで正確に覚えているのは、その日が白露（二十四節気の一つで、このころから空気が冷えて秋の気配となる）だったからだ。チョン・デヒョン氏がトーストと牛乳の朝食をとっていると、キム・ジョン氏が突然ベランダの方に行って窓を開けた。日差しは十分に明るく、まぶしいほどだったが、窓を開けると冷気が食卓のあたりまで入り込んできた。ジョン氏は肩を震わせて食卓に戻ってくると、こう言った。

「ここんとこ朝の風が冷たいと思ったら、今日は白露だったねえ。黄金色に実った田んぼに、まーっ白な露が、降りただろうよー」

デヒョン氏は、何だか年寄りくさい妻の話し方を聞いて笑った。

「どうしたんだい、君。お義母さんそっくりだよ」

「そろそろ、薄手のジャンパー一枚持っていきなさいよぉー、デーヒョンさん。朝晩、冷え込むからねえ」

そのときもデヒョン氏は、妻がふざけているんだと思っていた。「いきなさいよぉー」と念を押すときに右目をちょっとしかめるところも、自分の名前を呼ぶときに「デー」と伸ばすところも、ほんとに義母の癖にそっくりだったから。こ

のところジョン氏は育児疲れのせいか、宙を見つめてぼんやりしていたり、音楽を聴きながら涙をぼろぼろこぼしたりすることもあった。だが、妻はもともと明るい性格だしよく笑うし、テレビのお笑い番組を見るとすぐにその真似をして笑わせてくれる人だったから、大したことはないと思い、彼女を一度ハグすると出勤した。

その晩デヒョン氏が帰ってくると、ジョン氏はもう娘と一緒に寝ていた。二人とも親指をしゃぶっている。その姿は愛らしかったが、デヒョン氏はちょっと呆れつつしばらく眺めた後、妻の腕を引っ張って口から指を出させた。ジョン氏は赤ん坊のようにちらりと舌をのぞかせて、チッチッと何度か唇を鳴らしてから寝入った。

何日か経ってジョン氏は、自分は去年死んだチャ・スンヨンだと言い出した。チャ・スンヨン氏とは、ジョン氏にとってはサークルの三年先輩にあたる女性で、デヒョン氏にとっては大学の同期生である。

夫婦は同じ大学の同じ山登りサークルの先輩と後輩にあたるのだが、実は在学

中には一度も顔を合わせたことがない。デヒョン氏は学部を出た後も勉強を続けるつもりだったが、家庭の事情のためにあきらめなくてはならなかった。そこで、三年生を終えたところで遅めの兵役につき、二年後に除隊した後は一年ほど休学して釜山の家で暮らし、アルバイトをしていた。ジヨン氏はその期間に入学してサークル活動をしていたのである。

チャ・スンヨン氏は女子の後輩の面倒をよく見てくれる先輩だった。ジヨン氏とは、登山が好きでないという共通点のために親しくなり、スンヨン氏が卒業した後もよく会う仲だった。デヒョン氏とジヨン氏が初めて会ったのも、彼女の結婚披露宴である。スンヨン氏は二人めの子を出産するときに羊水塞栓症で亡くなったのだが、ただでさえそのころ産後うつだったジヨン氏は、日常生活を送るのも困難なほど悲しんだものだ。

その日はジウォンちゃんを寝かしつけると、久々に夫婦で向かい合ってビールを飲んだ。一缶をほとんど空けるころ、ジヨン氏が急に夫の肩をトントンたたくと、こう言った。

「ねえ、デヒョン。ジヨンが最近すごくしんどそうだよ。体は少しずつ楽になる

けど、気持ちが焦って辛い時期なんだよ。よくやってるねとか、ご苦労様とか、ありがとうとか、ちゃんと言ってあげた方がいいよ」

「そりゃまた何だよ、ジョン。幽体離脱話法〔自分のことを他人事のように語る様子を指し、当事者責任を欠いたパク・クネ元大統領などがその代表といわれる〕か？　わかった、よくやってるよキム・ジョン。ご苦労様、ありがとう、愛してるよ」

デヒョン氏はかわいいなと言いたげにジョン氏のほっぺたをそっとつまんだ。しかし、ジョン氏は真剣な顔で手をさっと払いのけた。

「あんたったら。まだ私のこと、真夏にぶるぶる震えながら告白した二十歳のチャ・スンヨンだと思ってんの？」

デヒョン氏は一瞬凍りついた。そうだ、約二十年前の真夏の真昼のことだ。日差しがひどく熱く、手のひらほどの小さな影も見当たらないグラウンドの真ん中だった。どうしてあそこにいたのかも思い出せないけど、とにかく偶然、スンヨン氏と鉢合わせした。すると彼女が突然、好きだと言ったのだ。好きですと――大汗をかき、唇をぶるぶる震わせ、口ごもりながら。だがデヒョン氏が当惑した顔を見せると、スンヨン氏はすぐに気持ちを引っ込めた。

「あ、あんたはそうじゃなかったのね。わかった、今日のことは聞かなかったことにして。なかったことだからね。私は今までどおりにあんたに接するから」

そしてとぼとぼと運動場を横切って消えたのである。以後、スンヨン氏はほんとに何ごともなかったように平然とデヒョン氏に接したから、デヒョン氏は暑さのせいで幻を見たのではと思うほどだった。今まですっかり忘れていた。なのに妻がその話をするなんて。もう二十年も前の、二人だけが知っている、日差しが焼けつくようだったあの日のことを。

「なあ、ジヨン」

それ以上言葉が出てこない。そしてデヒョン氏は妻の名前をあと三回ぐらい呼んだらしい。

「ちょっとぉ。あんたが良いご亭主だってことは、みんな知ってるわよ。だからもうジヨンの名前呼ぶの、やめてよ。まぁったく、もう」

それは酔ったときのスンヨン氏の口癖だった――「まぁったく、もう」。デヒョン氏は頭皮がぞーっとして、髪の毛が全部ぎゅうーっと逆立つような気がした。無理に平気なふりをして、いたずらはよせよと何度も何度も言ったのだが、ジヨ

ン氏は飲み終えた缶をテーブルに置くと歯磨きもせずに部屋に入って娘の隣に横になり、正体もなく眠りこけてしまった。デヒョン氏は冷蔵庫から缶ビールをもう一本取り出して一気に飲んだ。いたずらなのかな。酔ったのか。テレビに出てくる憑依現象とか、そんなのだろうか。

翌朝、こめかみをぎゅうぎゅう押しながら起きてきたジヨン氏は、昨夜のことは全然覚えていないようだった。やっぱり酔っ払ってたのかとデヒョン氏は一瞬安心したが、あんな恐ろしい酒癖があるのかと思うと改めてぞっとする。どう見ても、単に酔っ払って意識を失っただけとは思えない。しかも、たかだか缶ビール一本で。

その後も変なことは少しずつ続いた。ふだんは使わないかわいいスタンプだらけのメッセージを送ってきたり、明らかに彼女の料理の技術では作れない、また本人が好きでもない四骨汁（サゴル）〔牛の脚の骨をじっくり煮出したスープ〕やチャプチェを作ったりする。デヒョン氏にはしょっちゅう、妻が他人に思えた。二年間熱烈な恋愛をし、三年間ともに暮らした妻が、雨の日に落ちてくる雫の数ほど語り合い、雪の日に舞う雪片の数ほど愛し合い、互いに大事にしあってきた妻が、そして自分たちにそっくり

なかわいい娘を産んでくれた妻が、どうしてもこれまでの妻と同じ人に思えない。

秋夕（チュソク）〔旧暦の八月十五日の中秋節。一年で最も重要な祭礼の日であり、前後一日を含めて公休日となる。里帰りして先祖の墓参りをするのが恒例〕の連休にデヒョン氏の実家へ行ったとき、事件は起きた。デヒョン氏が金曜日に休暇を取り、三人家族は朝の七時に家を出て五時間かけて釜山に着いた。実家に着くとすぐにデヒョン氏の両親とお昼ごはんを食べ、長時間運転に疲れたデヒョン氏は昼寝をした。以前は交代で運転していたが、娘が生まれてからはデヒョン氏が一人で運転している。赤ん坊はベビーシートが窮屈なのか車に乗ると必ず泣き、ぐずり、かんしゃくを起こすし、遊んでやったりおやつを食べさせたりしてなだめるのはジヨン氏の方が上手だからだ。

ジヨン氏は昼ごはんの皿洗いをして、コーヒーを飲んでちょっと休むと、姑と一緒に秋夕料理の材料を買いに出かけた。夕方からは四骨汁にする牛の脚の肉のアクを抜き、カルビを調味料に漬け、ナムルの材料を下ごしらえしてゆで、一部はあえて一部は冷凍室に入れ、チヂミや天ぷらにする野菜と魚介類も洗って下準備するとともに、夕ごはんを作って食べて後片づけをした。

翌日はまた姑と一緒に、朝から夕方までかけてチヂミを作り、天ぷらを揚げ、カルビを煮込み、ソンピョン〔秋夕に食べる餅〕の生地をこね、あいまあいまにごはんのしたくをした。家族はできたての秋夕料理を食べて楽しい時間を過ごし、人見知りをしないジウォンちゃんはおじいちゃんおばあちゃんに喜んで抱っこされ、愛嬌を振りまき、しっかりかわいがってもらった。

その翌日が秋夕の本番である。本格的な儀式はソウルに住むデヒョン氏の従兄が執り行うので、実家が来客でごった返すことはない。家族全員がゆっくり休み、前日に作った料理で簡単に朝ごはんをすませて皿洗いを終えるころ、デヒョン氏の妹チョン・スヒョン氏の一家がやってきた。デヒョン氏の二歳下、ジヨン氏の一歳上にあたるスヒョン氏は、夫と二人の息子と一緒に釜山に住んでおり、夫の実家も釜山だ。夫の実家は本家なので、正月や秋夕に料理の準備をしてお客様を迎えるストレスは多大なものがある。だからスヒョン氏は実家に来るなり足を伸ばしてくつろぎ、ジヨン氏と姑はじっくり煮込んだ四骨汁をベースに里芋汁〔秋夕料理の一つ〕を作って出してやり、新たにごはんを炊き、魚を焼き、ナムルを作ってお昼の食膳を調えた。

食事が終わるとスヒョン氏は、ジウォンにあげようと思って買ってきたのよと言って、カラフルなワンピースやシュシュ、ヘアピン、レースの靴下などをどっさり取り出した。自分でジウォンちゃんにヘアピンをつけてやり、靴下もはかせてやり、女の子がいたらよかったなあ、やっぱり娘は最高ねなどと言って、姪っ子がかわいくてたまらないようすである。その間にジョン氏はりんごと梨をむいたが、みんな満腹なので見向きもしない。ソンピョンを出すと、スヒョン氏だけが一個とって食べながらこう言った。

「お母さん、このソンピョン、手作り?」

「もちろんよ」

「ああ、もう。こういうのもうやめようよ。さっきも言いかけてやめたんだけど、これからは四骨汁もチヂミもお店でちょっとだけ買えば十分だよ。ソンピョンだって餅屋で買ったらいいじゃない。本家でもないのに何でこんなにいっぱい料理作るの? お母さんだって、その年になって苦労することないでしょう。それにジョンさんも大変だし」

その瞬間、姑の顔に寂しそうな表情が浮かんだ。

「家族に食べさせたくてやってることじゃないか。これのどこが苦労なんだい？みんなで集まって、料理して、食べるのが楽しみなのに」

そして姑はいきなりジョン氏に尋ねた。

「あんた、大変なの？」

そのときだ。ジョン氏の頬がさーっと赤くなったと思うと突然、まるでおばあさんのような、情のこもった表情になった。目もうるんでいるようだ。デヒョン氏は不安になった。だが、妻を連れ出したり、話題を変えたりするすきもなくジョン氏が答えた。

「ああ、もう、お義母さん。うちのジョンはねえ、実は、帰省のたびに体をこわすんですよぉー」

しばらくの間、誰も呼吸さえできなかった。巨大な氷河の上に家族全員が座っているみたいな寒々しさだ。スヒョン氏が長いため息をつくと、それがまっ白な吐息となって散っていくように思えた。

「ジ、ジウォンのおむつ、替えた方がいいんじゃないか？」

デヒョン氏があわてて妻の手をつかんでひっぱったが、ジョン氏はそれをバッ

と払いのけた。

「デーヒョンさん！　あんたも、そうだよ。秋夕だって正月だって、連休はずっと釜山ばっかり。うちに来たときは、床にお尻をつけたと思ったらすぐ帰っちゃうじゃないか。こんどはもう少し、早く来なさいよぉー」

そう言うと、この前の朝もやってみせたように右の目をしかめる。そのとき、弟とふざけていたスヒョン氏の六歳の息子がソファーから落っこちて泣き出したが、誰もとりあわない。大人たちがみな口をぽかんと開けて心ここにあらずのありさまなので、子どももすぐに妙な気配を悟って泣きやむ。そして、デヒョン氏の父親が一喝した。

「ジヨンや、どうしたんだい？　目上の人たちの前で何てことを言うんだ。デヒョン一家とスヒョン一家が全員そろう機会は一年に何度もないんだよ。秋夕に家族で過ごすのがそんなに不満かね？　そうなのかね？」

「お父さん、違いますよ」

デヒョン氏が割り込んだが、彼自身もどう説明したらいいのかわからないのだった。するとジヨン氏が夫を押しのけ、落ち着き払って言った。

「お言葉ですが、申し上げますよ。お宅だけが家族ですか？　うちだって、家族なんですよ。うちの三人の子どもたちも、大きな祭日でないかぎり全員そろうことなんぞありません。最近の若い人たちは、みんなそうでしょう。お宅の娘さんが帰省してるんだったら、うちの子だって里帰りさせてくださいよ」

とうとう、デヒョン氏は妻の口をふさいでひっぱり出した。

「体調が悪いんだよ、父さん、母さん、スヒョン。ほんとだよ。ジョンは最近、調子が悪いんだ。あとでちゃんと説明するからさ」

三人は服も着替えずに車に乗り込んだ。デヒョン氏がハンドルにつっぷしてため息をついている間、ジョン氏は何ごともなかったように娘に歌を歌ってやっていた。両親は見送りにも出てこず、スヒョン氏が兄の荷物をまとめてトランクに入れながら言った。

「ジョンさんの言う通りだよ、兄さん。うちが無神経すぎるんだよ。けんかしないで、怒らないで、ありがとう、ごめんねで通すのよ。ね、わかった？」

「わかった、行くよ。父さんにはうまく言っといてくれ」

デヒョン氏は怒っていなかった。それよりも困り果て、混乱し、怖かったのだ。

まずデヒョン氏が一人で私の精神科を訪れ、妻の状態を説明して治療法を相談した。ジョン氏は症状を自覚していなかったが、眠れないし、辛そうなので、ともかくもカウンセリングを受けてみることを勧めた。ジョン氏は、そうでなくとも最近気分が沈み、何ごとにも意欲が湧かず、育児うつではないかと思っていたと言い、私の提案に感謝した。